

もがき続けた先に

第16期ゼミ生 土谷 鈴

私の自宅から徒歩30秒ほどのところに、東京スイミングセンターという水泳教室がある。私が幼少期、涙を流しながらイヤイヤ通った水泳教室であり、アテネオリンピックおよび北京オリンピックの金メダリスト、北島康介選手をはじめとする、数多くのオリンピック選手を輩出してきた水泳教室である。同水泳教室では、以前、次のような水泳教育が行われていたという話を耳にしたことがある。それは、まだ歩くこともままならない子供を、足がつかない水深のプールに入れ、離れたところにいる母親のもとまでもがさせるという水泳教育である。子供は溺れながらも、なんとか母親のもとに辿り着こうと必死にもがく。そうしてもがいているうちに、どうすれば水に浮くのか、どうすれば前に進めるのかなどを習得し、水泳の礎を学ぶことができるのだという。

振り返ってみると、小野ゼミに入会して間もない頃の私は、足のつかない水深のプールに入れられ、溺れている子供のごようであったように思う。入会当初は、「もっとゼミ活動に必死になって欲しい」という思いを同期に強くぶつけてしまい、「あの子にはついていけない」と思われてしまったことがあった。三田祭論文執筆活動では、論文の進捗が芳しくなく、完成を締切に間に合わせるができなかった。ゼミ長という立場でありながら、先生と話すときに緊張してしまい、上手く話すことができなかった。私よりも先生と共通の話題を多く持っている同期を見ると、悔しかった。海外学会や企業訪問などのイベントの際は、準備不足のせいで、イベントを上手くコーディネートすることができなかった。上手くできないことが多々あり、自分を責め、何度も涙を流した。だからこそ、私は必死にもがいた。言葉で上手く伝えられないのなら、自分が必死に頑張る姿を見せることで、同期を引っ張ろうとした。三田祭論文を完成させるために、何度も恵比寿で徹夜をした。先生との共通の話題を増やすために、小野ゼミのホームページからOB・OGの方々のエピソードを蓄えたり、先生の好きなラーメンを好きになったりした。イベントを上手くコーディネートするために、事前に訪問する場所の下見を行い、ルートやスケジュールを詳細まで考えた。そうしているうちに、どうすれば上手く同期を引っ張ることができるのか、どうすれば論文を上手く前進させることができるのか、どうすれば上手く先生と話することができるのか、どうすれば上手くイベントをコーディネートできるのかを習得し、入会して間もない頃と比べれば、様々なことが上手くできるようになったように思う。

今、この卒業エッセイを、もし、小野ゼミでのゼミ活動で苦しんでいる後輩が読んでいるのならば、もし、社会人生活に疲れてしまった未来の自分が読んでいるのならば、諦めずにもがき続けて欲しい。もがき続けた先に、成長した自分が待っているのだから。